# 温もりはセイキ

竪川杼緯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
温もりはセイキ

【Ｎコード】
Ｎ６８７５Ｓ

【作者名】
竪川杼緯

【あらすじ】
二ノ宮一輝はある日腰に羽の生えた美少女二人と不思議な出会いを果たす。パタとシールは言う。自分たちは矛盾だと。きゃっきゃうふふと笑いながら一輝に襲い掛かる二人を相手に一輝は……。
（ちょっとした気晴らしにでもなれば幸いです）

## きゃっきゃうふふの少女たち

きゃっきゃうふふと少女たちが笑う。
「ニー様ったらどこを見てらっしゃるの～？」
「らっしゃるの～？」
少女たちはただ笑う。責めているわけではない。ただ言葉のまま尋ねているだけ。
ニー様と呼ばれた少年は大きく息を吐き出した。
「おまえらの体の構造を不思議に思ってただけだ」
この言葉にようやくこれまでとは違う反応が少女たちに現れた。
無垢なほほえみから妖艶な笑みへと。
「わたくしたちは人間ではないのですから考えたところで無駄ですわよ」
「わよ」
よく似た少女たちはけれども双子というわけではない。そして本人が告げたように人間ではない。それは見かけからして一目瞭然ではあったが。
二人の少女は腰のあたりから小さな羽が生えていた。
すらりと伸びた真白い素足は、丈の短いスカートをさらに短く感じさせるほどに長い。
髪の長さは二人とも腰のあたり。ちょうど羽に触れるくらいで、一人は緩やかなウェーブを描き、もう一人はまっすぐに流れ落ちる滝のよう。動きに合わせてさらりと揺れるのはどちらも同じ。
印象としては黄金と紅蓮。朝焼けと夕焼けといった感じだろうか。共通しているのはどちらの少女も十分美少女と呼ばれるほどに見目がいいということだった。
一方の少年はただの人間。少し長めのショートカットといったような中途半端に伸びた黒髪。日本の高校生としてはほぼ平均の身長や体型をしており集団の中に入れば周囲と同化して埋もれてしまう

ほどに容姿をも含めて平々凡々だった。
そんな少年がなぜこんな美少女二人と知り合うことになったのか。
それはほんの二日ほど前のことだった。
少年の名前は二ノ宮一輝（にのみやかずき）。高校二年生である。
その日はやけに生ぬるい風が吹いていた。
「一輝、今日遊びに行ってもいいか？」
一輝の両親は現在長期海外出張中。そのため一人暮らしの状態にあり、気楽に騒げるからと友人たちがこぞって一輝の家に遊びに来たがっていた。
今日の授業は先ほど終わり帰宅部の一輝はあとは帰るだけといったところで、今日もこうやって声をかけてきた者がいた。
「ん……」
「なんだ？　はっきりしない返事だな。予定でもあるのか？」
特に用事があるわけでもない。誰かと約束があるわけでもない。
声をかけてきた友人――千石洋介（せんごくようすけ）は何度も遊びに来たことがあり、騒ぎすぎたり散らかしたりといったことをしないので家に呼んだとしても何の問題もない相手ではあった。
しかしなぜだか今日は気が乗らなかった。
そのことを洋介に告げると、何のこだわりもなくそれならまたの機会にと言って自分の家へと帰っていった。
それを見送った一輝は内心首をかしげた。
一人で帰ったところで何をするでもなく。いつものように途中のコンビニで夕飯を買って帰ること以外に予定などない。
むしろ来てもらった方が楽しめることは確かなはずなのに。
「なんだかな……」
わけがわからないと、一輝は軽く頭を掻く。
断ったものは仕方がない。それに今同じように誰かに聞かれればやはり同じように断るような気がする。
これはさっさと帰ってネットでもするか、と一輝は考えながら帰路へとついた。

桜も散って、ずいぶんと日も長くなった。
ぶらりぶらりと散歩でもするようにゆっくりと歩いていた一輝がふと空を見上げると、さっと光が走った。
「流れ星……？」
ほんのわずかな間だったから確証はないが、光が走るといえば一輝にはほかの理由が思い浮かばなかった。
ただし空を流れるというよりはその先の公園あたりに落ちでもしたような感じにも見えたが。
「……まさかな」
へらりと苦笑しながら一輝が改めて公園へと視線を向けると、斜め前にあるその公園の方向から強烈な爆風とも思えるほどの風が一輝に襲い掛かってきた。
「く……っ。な……っんだこれ！？」
目を守るように右腕をかざして一輝は踏ん張った。気を抜けば飛ばされてしまいそうだと焦りが浮かんでくる。
と、その時。
「ひやぁぁぁん」
「あぁん」
そんな悲鳴をかわいらしい声であげながら二人の少女が狙ったように一輝めがけて風に飛ばされてきた。
「へ？　うわああぁぁぁ、がふっ」
気づいた直後にはすでに一輝の目の前にいた二人。反射的に受け止めたもののこの爆風の中では踏ん張りが利かず、勢いにのまれて三人仲良く飛ばされる羽目になった。
すぐにそばにあった樹木にぶつかったため、飛距離はほんのわずかではあったが、少女二人を抱きとめた状態で背中から樹にぶつかった一輝は思わず情けない声をあげてしまった。
「痛ってー！　ったく、いったいなんだったんだよ……」
ぶつくさと不平をこぼしていた一輝はふと我に返って左右を見渡した。

「あー、やーっと風止んだのか……」
ほうっと息を吐き出した一輝は、腕の中の二人の少女へと視線を落とした。
「おい、大丈夫か？」
軽くゆすりながら声をかければすぐに少女たちは目を覚ました。
状況がわかっていないのか、ぼんやりとした顔で一輝を見上げてくる四つの瞳。一輝はもう一度大丈夫かと声をかけた。
「あら～？　こんなところにいらっしゃったのですね～」
「ですね～」
ようやく声を発したかと思えば、少女たちはそんなわけのわからないことをつぶやきながら一輝の首へと腕を回してきた。
「え？　おい！　ちょ、やめっ」
やや幼げでぽやぽやした雰囲気の美少女二人に抱きついてこられた一輝は慌てるが、なにぶんにも背後に樹があってこれ以上後ろにはさがれない。しかも二人ともに意外にも豊満な胸をしており、それがぐいぐいと押し付けられている。一度意識してしまえば一輝とてお年頃。困惑の中にもなんとも言えない快感が……げふんげふん。気づけば美少女二人をしっかと抱き返していた。
（あ、やべ、気持ちよくってつい）
一輝は慌てて手を放したものの、少女たちはぎゅう～っと抱きついたままだ。
「あの、さ。いいかげん放してもらいたいんだけど」
眉尻を下げて一輝は懇願する。
するとようやく一人が顔をあげた。キラキラと何かを期待しているような瞳で一輝を見上げてくる。
「お名前はなんとおっしゃるのですか～？」
「ですか～？」
もう一人の少女も一輝を同じように見上げてきた。
こうして見比べてみれば顔立ちはよく似ている。
双子かな、と思いながら一輝は素直に答えていた。

「俺は二ノ宮一輝。あんたたちは？」
「パタですわ」
「シールですわ」
いつも最初に話すのは緩やかにウェーブしている黄金色（こがねいろ）の髪が腰まで伸びているパタだ。そして紅蓮色の髪がまっすぐ腰まで流れているのがシールだ。
じっくりと見返すと、瞳の色も髪と同じだということにも気づいた。
そしてあることにも。
一輝はいったん視線を上へとそらして一呼吸おいてからまた改めて見直す。そうして幻覚ではないことを確認してから口を開いた。
「なあ、おまえたちの腰にあるソレは……」
本物なのかどうなのか聞こうとしたのだが、やはり言葉に詰まった。コスプレなのにと笑われそうでどうしても尋ねることに抵抗を覚えてしまう。
なにせ二人の少女の腰には小さな羽がついていたのだ。ついているのか、生えているのか。かすかに動いているようにも見えるが、今の技術であれば簡単にできるのではないかとも考えられる。一輝はまさに頭を抱えた。
「これですか～？」
苦悩する一輝をよそに、のほほんと答えながら自身の腰を振り返ったパタが羽を動かす。鳥のように羽ばたく姿は本物のような。いやしかし。
「ああ、その羽は」
「本物ですわ」
「ですわ」
最後まで聞かずにパタとシールは答えた。きゃっきゃうふふと無邪気な笑みを浮かべて楽しそうにターンしながら羽を動かす。
「触ってみます～？」
「みます～？」

そう言われればたしかに触ってみたいなと一輝はうなずいた。
パタとシールは一輝の前に並んで腰の羽を差し出した。
そっと優しく。むしろ多少の怯えを含んでそっとそーっとと自身に言い聞かせながら一輝は指の腹で二人の羽を撫でてみた。
「いやぁぁん」
「ひゃぁん」
「うわあ、ごめんなさい！」
ほんの少し撫でただけにもかかわらず突然二人が変な声をあげたため、一輝は反射的に両手をあげてホールド・アップの体勢をとるとともに叫ぶように謝罪の言葉を口にした。
逃げ腰になったことで一輝は再び樹に張り付いたような形になった。
（触っていいって言ったのはそっちじゃないかー）
心の中で抗議するも声に出す勇気はなく、一輝は心中で冷や汗を流しながら二人からの返答を待った。
帰ってきたのは二人の楽しそうな笑い声だった。
「いやですわ、ニー様。羽は本物でちゃんと感覚があると証明して見せただけですのに～」
「のに～」
なんともややこしいことをしてくれたものだ。いやそれよりも。
「ちょっと待て。そのニー様ってのはなんなんだよ！　俺は二ノ宮一輝。二ノ宮か一輝のどっちかで呼べよ」
だが一輝の主張は一瞬で蹴られた。
「ですがニー様。二ノ宮の『二ノ』は『ニー』にも見えますし、二ノ宮の『二』と一輝の『一』はカタカナの『ニー』とそっくりでしょ～？　だからニー様ですわ～」
「ですわ～」
一瞬納得しそうでそれでいてまったく意味不明なことを言ってきたパタに、一輝は反論をあきらめた。
どう考えても勝てる見込みがなかったからだ。

特に頭がいいわけでもなく、口が達者なわけでもなく。なにからなにまで平々凡々な一輝はこの少女たちのように感覚だけで生きているようなタイプは苦手だった。母親がそういった発想を得意とする人種で、子供のころから一輝は振り回されてきたのだ。そこで学んだことは『君子は危うきに近寄らず』と『スルー力』である。

もっともこういう言い方をすれば多少かっこよく聞こえるだろうという一輝の最後の抵抗であって、実際は『あきらめ』という情けない状態でしかなかったが。

なんとなくもやもやする気持ちをため息と一緒に吐き出した一輝は、改めて少女たちへ向き直った。

羽にばかり意識がいっていたが、髪の色も瞳の色もよく考えれば異常だった。最初は髪は染めているかウイッグで、瞳はカラーコンタクトだと思っていたがじっくりとみればそれぞれ自前であることがわかった。

「なあ」

声をかければうれしそうに見上げてくるパタとシール。一輝はちょっと困ったように顔をしかめながらも続けた。

「おまえらって……何者なんだ？」

「矛盾ですわ」

「ですわ」

「はあ！？」

矛盾といえばあれだ。ほことたて。つじつまが合わないことのたとえ。

さすがに一輝も声を荒げた。

「人が真面目に聞いているのにその態度はなんだよ。いいかげんにしろよ！　何者か知らないけど知らないままでいいわ。だからもう俺にかかわってくるなよ！」

吐き捨てるようにそう言い切った一輝は即座にその場を走り去った。

「ッたくなんなんだよあいつら。人がおとなしくしてたらつけあが

りやがって」
ぶちぶちと不満をこぼしながらも一目散にその場から離れた一輝はだから知らなかった。少女たちがこぼした言葉を。
「正直に答えましたのに、なぜニー様は怒ってしまわれたのかしら～」
「かしら～」
二人の少女は揃って首をかしげる。
「それとも今は矛ではなく剣だと訂正が必要でしたかしら～」
「かしら～」
パタとシールは一輝の姿が見えなくなるまでそのまま見送り、そして静かに姿を消した。

## そんなところまで！？

腹を立てて走っていながらも一輝はコンビニで夕食を買うことは忘れなかった。むしろ余計にお腹がすいていつもより買い込んでしまったほどだ。

ついでに漫画雑誌やお菓子類まで手を出した。

「あいつらのせいでえらい出費だ」

毎月親から一輝名義の口座に生活費とお小遣いを振り込まれているとはいえ、高校生相応の小遣いしかない。

ゲーム機本体は親に買ってもらったが、肝心のゲームのソフトは自分の小遣いから買わないといけない。

食費を削ってほかのものを買えば、ぽやぽやした母親であるにもかかわらずいったいどんな技を使ったのかそうした時だけは素早く嗅ぎ付けて説教の嵐を受ける羽目になった。どこにどんな人脈があるのかいまだにわからないため、一輝はとりあえず食事だけはちゃんととるようにしている。もちろん自炊などはしないしできないが。

そうした日々の積み重ねが功を奏したのか、今回も食事を抜くようなへまはせずに済んだ。それはそれで深く考えれば情けなくなってくるのでスルーする。

そうやってたどり着いたのはマンションの最上階にある我が家。

十四階建てのマンションの最上階は周りにそこまで高い建物がないので見晴らしがよく、外から覗かれることもないので気楽でいい。

またすぐ下の十三階はトレーニングジムになっているので、階下への気兼ねもなく過ごせることも気に入っている。

帰宅した一輝はリビングへと直行した。一人ではわざわざダイニングテーブルで食事をする気にはなれず、親がいないときはいつもリビングでテレビを見ながら食べていた。

今日もそうやってリビングの電気をつけた直後。

「ニー様おかえりなさ〜い」

「なさ～い」
そこには二人の美少女パタとシールがにこやかな笑顔で立っていた。
目と口を開いたまま固まっていた一輝は、突然テーブルへ荷物を置くと、家じゅうの窓の鍵を確認し始めた。
最上階といえば屋上からの侵入もあり得るので戸締りはきちんとするように言われていた一輝は毎日施錠の確認を怠ったことはない。だがもしかしてということもある。現に彼女たちが目の前にいる状態ではその確率が増した。
だが結局はすべての鍵はかかったままだった。
開いたところから侵入して鍵をかけたとも考えられるが、彼女たちを見ればそんなことをするようには見えない。むしろ堂々とどこそこが開いていたから入ってきたのだと暴露しそうだ。この考えは一輝の母親が基本となっている。パタとシールに雰囲気がよく似ている彼の母親はそうした言動が多い人だった。
ちらりと見やれば、少女たちは先ほどのことなどなかったようにニコニコとしている。
（俺にかかわるなと言ったのに）
自分のことを軽んじられているようで一輝は相も変わらず機嫌が下降する一方だった。
一輝は眉間にしわを寄せて唸るような低い声で尋ねる。
「どうやって入った」
自宅の住所くらいなら調べることは簡単だろうと思って聞かなかった。美少女二人にかわいくお願いされれば、一輝だって友人の洋介の家くらいなら教えてしまうかもしれない。いや、かもしれないということで……げふんげふん。
パタとシールは一輝の不機嫌さなど気にした様子もなく揃ってかわいく首をかしげた。
「わたくしたちには窓も壁も無意味ですわ～。行きたいと思えばどこへでも行けますもの～」

「もの～」
「なんだって……？」
かすれた声になってしまったのは無理からぬことだろう。
ファンタジーは一輝も好きだ。漫画も小説もよく読んでいる。だがファンタジーの世界の良さは二次元にあってこそだと一輝は頭を抱えた。そうして脱力した一輝は沈み込むようにソファーに腰を落とした。
のろのろと顔をあげた一輝が二人に視線を向けると、少女たちはいっそうにっこりとほほ笑み、そしてその姿が一瞬にして掻き消える。直後には一輝の両脇に柔らかい弾力と温もりが寄り添っていた。
「こんな風にですわ～」
「ですわ～」
少女たちが一輝の腕に抱きついてきたため、再び胸の弾力が両腕に……げふんげふん。
「ちょっ、だからやめろって！　くっついてくるな」
振り払おうとすればなおいっそうしがみついてくるパタとシール。
（なに？　俺、もしかして喰われようとしてんの？）
焦る一輝とは対照的に、少女たちはのんきにマイペースで問いかけてくる。
「これでわかってもらえました～？」
「ました～？」
「わかったからとりあえず放れろ！」
やけっぱちに叫べば、ようやく彼女たちはしぶしぶながらも一輝の腕を開放した。
「ニー様のはとってもおいしかったのに残念ですわ～」
「ですわ～」
そんな風にパタが聞き捨てならないことを言うものだから、今度は反対に一輝がパタの肩を捕まえる羽目になった。
「ちょっと待て。それはどういう意味だよ。おいしい？　何をどうしたらそんな表現になるんだよ。お前らマジで俺を喰う気か？」

「ニー様ったらせっかちさんですね～。食べるのは最後ですわ～」
食べるのは最後。
ということは最後には食べるということ。
一輝は顔を蒼褪めてパタから逃れるように体を後ろにそらした。
が、そこにはシールがいた。寄ってきたのだと勘違いしたシールが嬉しそうに一輝の背中から抱きつく。
一輝は反射的に悲鳴をあげてしまった。
すぐに手で己の口を塞いだ一輝だったが、一瞬とはいえ出てしまった悲鳴はなかったことにはできない。今度は赤面した一輝がじとりと恨めし気にパタを見やった。
「俺を喰ってもうまくないと思うが」
一応の抵抗は試みる。しかし。
「いいえ～。ニー様はとっても美味しゅうございますわ～」
「ますわ～」
もうちょっと頑張ってみる。
「どうやって喰うんだ？　殺人も人食いも犯罪なんだが」
頑張る方向性がずれているが、結果としてはこれでよかったようだ。
パタ曰く。
食べるといっても血肉をぼりぼりと喰らうのではなく、セイキをいただくだけとのこと。セイキは生気であり精気でもある。
そして先ほどおいしいといったのが生気で、最後に食べるのが精気ということだった。
生気は体が触れあっていれば食べれるらしい。
「それじゃあ精気は……？」
パタとシールは同時に唇を舐めた。
無邪気な雰囲気と幼げな面に豊満な肉体。そんな少女たちが揃ってそんな仕草を間近で自分に向けておこなう。
何度も言うが一輝とて年頃の少年である。むしろ体だけならすでに成長している。そんな状態で、そんな仕草をやられた日には……

げふんげふん。
気持ち前かがみになった一輝を見て、パタがくすりと笑った。
「ニー様が考えられたとおりですわ～」
「ですわ～」
見抜かれた羞恥で一輝の顔に赤みがさす。
拗ねたように顔を逸らせば、パタとシールが歓声をあげた。
「ニー様かわいい～」
「いい～」
「うるさい！」
一輝は二人をぎろりと睨みつけると、コンビニで買ってきた弁当へと手を伸ばした。
「ニー様お食事ですの～？」
「ですの～？」
「見たとおりだ」
投げやりに答えてもいっこうにへこたれたりしない彼女たち。一輝は取り合えず空腹を満たすことにした。
が。
「わたくしたちもお腹がすきましたわ～」
「ましたわ～」
しゅんと肩を落としてお腹を撫でさする彼女たち。つい魔が差した一輝はポロリと口にしていた。
「なにが食べたいんだ？」
先ほど聞いたことをよく考えるべきだった。
一輝の言葉を受けてパタとシールは満面の笑みを浮かべて一輝に抱きついてきた。
「もちろんニー様～」
「ニー様～」
「のわっ」
危うく弁当を落としかけた一輝のこめかみがぴくぴくと動く。
「お～ま～え～ら～」

持っていた弁当をどうにかローテーブルの上に戻した一輝は、パタの手首をがしっと掴むとソファーの上に押し倒した。
「いいかげんにしないと本気で襲うぞ！」
膝を使ってパタの内腿を撫で上げ、そして。
けれどパタは怯えるどころかむしろ瞳をキラキラさせて期待しているように見えた。
（あれ？）
間違えたことに気づいたときはすでに遅し。シールが仲間に加わろうと一輝の背中に飛び乗ってきた。
「のわっ」
突然のことに耐え切れず、崩れた先にあったのはパタの胸。ようこそとばかりに一輝の顔をしっかりと受け止めた。更に後頭部にはシールの胸にまで迎え入れられた一輝の頭部は前後から胸に挟まれるという人によっては大喜びをするシチュエーションを体験させられた。
（く、苦しい……）
呼吸困難になってもがけば少女たちがうれしそうにはしゃいだ。
渾身の力を振り絞って腕立ての要領で体を起こした一輝は大きく息を吸い込んだ。
「シール、どけー！」
名前を呼べば、シールは素直に返事をしてすぐに一輝の上から降りた。
ほっと一息ついたものの、このまま腕から力を抜けばまたしてもパタの上に乗ってしまう。それは避けようと、横にずらしかけた一輝の体を抱き寄せたのはパタの腕だった。
疲れ切った一輝はすでにそこから逃れるだけの気力を持たなかった。そんな一輝ができたことといえば弱弱しい声で抗議することだけだった。
「パタ、離せ」
目を閉じていた一輝が気づいたのは温もりが触れたあとだった。

え、と思って開いた瞳に映ったのはパタの黄金色の瞳。吐息が奪われ、一輝はようやくパタに口づけられていることに気づいた。
反射的にパタの体を押し返し、その反動を利用して横に逃れた。
今回はやけにあっさりと逃れられたと思ったが、それは誤りだったようだ。逃れられたのではなく、いったん離れただけ。
仰向けに床に転がった一輝の体を拘束するように乗っかってきたパタとシールの行動によってそれが知れた。
「俺をどうする気だ……」
半ばどうとでもなれと投げやりな気持ちになりながらも、一輝の口は問いを発する。
「ニー様はこうやってただ横になっていてくだされば よいのですわ」
「ですわ」
パタとシール。二人の手が一輝の視界を塞ぐ。
「さあ、力を抜いて」
「抜いて」
少女たちの声が催眠術をかけるかのように静かに紡がれる。ゆっくりと瞼がふさがり、一輝は静かに眠りへと落ちていく。
かすかに衣擦れの音が聞こえた気がした。

腹の虫が盛大に泣き喚いた音で一輝は目を覚ました。
「あれ？　俺、飯……」
毎晩必ず夕飯を食べて寝ているはずなのになぜ空腹で目が覚めたのだろうかと一輝はぼんやりとした頭で記憶をさらう。
（ああそういえばあいつらが……）
そう思ったところで一輝は飛び起きた。否、飛び起きようとした。けれども両腕を何者かに拘束されていた一輝はただ体が跳ねただけに終わった。
「うお！？　ってなんで俺裸！？」
頭だけ起こして周囲を窺ってみれば、リビングの床に全裸で寝転ぶというなんとも破廉恥なことになっていた。

しかも一輝の両腕に抱きついているパタとシールすら全裸。そりゃーもういろんな部分が丸見え状態。
「おまっ」
おまえら何をやっているんだと言いたかった一輝だが、それ以上は言葉にならずただ口を開閉するだけしかできなかった。
（マジで腰に羽が生えてるよ）
深夜に煌々とした照明に隅々まで晒されている全裸の三人。カーテンのひかれていない窓は、鏡の役目をして彼らの姿を映す。足元にある窓は彼女たちのすらりとした足の先にあるプルンとしたかわいいお尻を映し、その奥の秘所さえも……げふんげふん。そのあいだに挟まれている自分の姿も当然同じように映っていた。
（どんな羞恥プレーだよ）
状況を確認しているととある部分がむくむくと反応しかけた一輝はやばいと視線を逸らす。が、しつこいようだが健全男子の一輝の視線は徐々に少女たちへと戻っていった。それは致し方ないことと言えよう。
開き直ってしばらく彼女たちの裸体を堪能していた一輝はふと気づいた。
（この状態ってことは……俺、もう喰われちゃった……とか？）
知らない間に童貞卒業してしまったのだろうか。
（こんなおいしいことをなぜ俺は覚えていないんだぁぁぁぁぁ）
思わず頭を抱えようとして動かした両腕が少女たちの豊満な胸を刺激した。
「ぁあん」
「っひゃん」
一輝自身も柔らかな感触に反応してしまったが、彼女たちの声にもさらに応えてしまってとある部分がとっても元気な状態になってしまった。
その様子を目を覚ました彼女たちに注視され、一輝は焦った。
「いや、これは、その……っ」

だんだん彼女たちがそこへと近づいていく。
「おい、ちょっと待て！　おまえら何を考えてるんだ！？　やめ、くっっ」
喰われる。そう思った一輝に反してパタとシールは両側から顔を近づけてそっと唇で触れただけだった。にもかかわらず快感が一輝を襲う。ただそれだけでイった時と同じだけの快感が得られるとはどうしたことか。
いや、しかし。
（あ～もうここまでくるとどうとでもしてくれって感じだな）
何を言う気も失せて、一輝は床の上に改めて体を投げ出した。
「ニー様、とってもおいしいです～」
「です～」
「……あ～それはよかったな……」
ひらひらと力なく手を振って答えれば、二人から「はい～」と嬉しそうな声が返ってきた。
どうやら眠っていた間も裸のほうが生気をとりやすかったからとかそんな理由でこんなことになっていただけで、実際に喰われたわけではなさそうだったのでまあいいかと思ってしまった一輝だった。
これがただの始まりとは知らずに。

## 俺はなにもしていない

しばらく休んだのちに起き上がった一輝はようやく己の食事にありつけた。
パタとシールには許可も得ずに先に食べたのだからもう邪魔はするなと言い置いてリビングにあるほかのソファーへと座らせた。
疲れていた一輝は買って帰った弁当や菓子をすべて平らげてしまった。これには本人も内心驚いていたが、よっぽど疲れていたんだなと適当に納得しておいた。むしろ考える気力すらなかったともいえた。
シャワーを浴びてすぐに寝室へ。
ふらふらとベッドに横になった一輝はパタとシールの存在をすっかりと忘れていた。
思い出したのは朝になってから。
目覚まし時計の音で起きた一輝は既視感を覚えた。
たしかにパジャマを着ていたはずなのにいつのまにか全裸になっている。両腕はやはり全裸のパタとシールに拘束済み。
一輝は天井に向けて大きく息を吐き出した。
「パタ、シール、朝だ、放せ」
朝はどうしようもない部分についてはもうあきらめて二人を起こす。
なんとなくそうなるだろうなと思ったとおり、二人は昨夜のようにそこへ口づけあっさりと寝かせてしまった。
もう乾いた笑いしか出てこない。
「おまえらいつまでこんなことやってるつもりなんだ？」
パタたちはきょとんとした顔で一輝を振り返った。
「全てが片付いてニー様の精気をいただくまでですわ～」
「ですわ～」
「あ、そ」

やはりそうなのかと思いながら一輝は考える。
そうしてこれだけは守ってほしいことを告げた。
「家の中でならこういうのもまああきらめてやるから、外では絶対にするなよ。とにかく人が見ている場所では服を着た状態でも抱きつくのも口をつけるのも禁止だ。いいな？」
「でもこれだけの生気ではわたくしたちは持ちませんわ～。肝心な時に力がでないようではニー様を守れませんもの～」
「もの～」
「守る？」
一輝は二人の瞳を順に見返した。
「誰から守るって？　おまえたちはいったいなんなんだ？」
「魔から守るのですわ～。わたくしたちはニー様の護衛を務める矛盾ですの～」
「ですの～」
片眉を持ち上げた一輝は、いったん視線を落としてから再び持ち上げて二人を見返した。
「矛盾ってのがお前たちのチーム名か？」
「そのようなものですわ～」
「ですわ～」
ようやく一輝にもわかってきた。断片的なものではあったが。
髪を掻きむしった一輝はふと時計を見た。
「そろそろ学校へ行かないといけない。お前たちは……ああ、そういえば思うだけでどこにでも行けるんだったな。とにかくおとなしくしていろよ」
支度しているあいだも、実際に出かける際もおとなしくリビングのソファーに座っていたので一輝は安心して登校した。
そして教室に入った瞬間その場にしゃがみ込んだ。
「お～ま～え～ら～」
小さく小さく唸った声が聞こえたのはパタとシールの二人だけだった。

いったいどんな技を使ったのか。クラスメイトには誰一人として疑問をもたれることなく受け入れられていた。
黄金（こがね）パタと紅蓮シール。
なぜ誰も変に思わないのか、このふざけた氏名を。いくらＤＱＮ（どきゅん）ネームとかキラキラネームとか呼ばれる変な名前が蔓延してきているとはいえ名字までこれでいいと思っているのだろうか。
いやしかし昔から小鳥遊（たかなし）とか四月朔日（わたぬき）とか百目鬼（とどめき）とか九（いちじく）とか朏（みかづき）とか四十八願（よいなら）とか百千万億（つもい）とかいろいろとあったわけだから、こうだと言われればそのまま受け止めるしかないかもしれない。こちらのほうがセンスが格段に高いが。
だからそういうことにしておこう、と一輝はそこでこの件について考えることをやめた。
「ニー様、おはようございます～」
「ます～」
髪と瞳の色を日本人らしいものに変えて腰の羽を隠す。そうすればどこからどう見ても女子高生にしか見えない。しかもとびきりの美少女。一般人だとは到底信じられないほど。が、彼女たちはモデルでもなければ女優でもアイドルでもない。
皆が皆美少女だと認識しているにもかかわらずそこで止まっていることが逆に異常だともいえよう。そのことを誰も不思議に思わないことも含めて。
いったいどんな技を使ったのか。
一輝はため息を一つこぼすと片手をあげてパタとシールに応えた。
「今日もモテモテだね一輝君」
がっしと一輝の肩を掴んでにやにや顔を近づけてきたのは洋介だった。セリフにものすごく棘がある。
こいつはこういうやつだと一輝は軽く受け流したが、そういうわけにはいかない人物もいた。
「二ノ宮君ったら不潔よ」

出た。
一輝は心の中でそう呟いた。
クラス委員の西田優芽（にしだゆめ）だ。
西田曰く。美少女を侍らせていてなにもしていないはずがないということだ。
西田も眼鏡を外せばそれなりの顔をしている。スタイルも悪くはない。あくまでも制服を着た状態での判断でしかなく、もちろん実物など拝んだことはないが。
（まあ昨夜と今朝はやっちゃったというかやられちゃったけどな……）
けれども彼女が言うようなことは何もしていない。そもそもそうした会話はパタとシールが来る前から言われ続けていたのだ。
そんな相手などまったくいないにもかかわらず、なぜだか彼女はどこからそんな知識を仕入れているのかといったことまでやっていると思い込んでいるらしい。あくまでも洋介からの情報でしかないが。
疲れたように息を吐き出した一輝はただ一言「俺はなにもしていない」とだけ答えた。
クラス中が耳ダンボ状態の中で放置すると瞬く間に事実として広められてしまうのでそれはどうあっても避けたい。そうしてしぶしぶお決まりのように否定の言葉を返すことがこれからも続きそうだった。
「やっぱり一輝君はモテモテだね～、このこの～」
茶化すのはやはり洋介だった。彼だけが一輝の無実を知っているといってもいい。
けれどこれからは洋介を家に呼ぶことはできなくなった。
パタとシールに生気を与えなければいけない。そんな姿などもちろん見せられるはずもなく、そもそも同じベッドで寝ているなど知られるわけにはいかないからだ。しかも全員全裸で肌を触れ合わせているのだから。

これで身の潔白を証明してくれる存在がいなくなる。
そのことに思い至り、一輝は再度ため息をこぼした。
朝からなぜこんなことで疲れなくてはならないのだろう。
一輝は己の不幸を嘆いた。

「か～ずき～、飯行こうぜー」
ようやく午前中の授業を終えてお昼休みがやってきた。一輝に声をかけてきたのはもちろん洋介だ。
登校時の騒ぎはすぐに収まり、またパタとシールもそれ以上は話しかけたり近づいたりしてこなかったので一輝としては助かった。
もっともいつ何をやらかすかと冷や冷やしていたのでそういった意味での疲れはあったが。
「おう」
きちんと食べないと体が持たない。そんなことを思いながら洋介への誘いに応じた一輝だったが、席を立って今朝コンビニで買ってきた昼食を手にしたところでがっしと両腕を拘束された。腕に当たるのは暖かくも柔らかな弾力を持つ四つのふくらみ。そう気づいたときにはすでに一輝はパタとシールに連行されていた。
「お、おい！　おまえらなにやってんだよ」
咎めたり、解放を求めたり。
けれど少女たちはいっこうに歩みを止めず、また一輝の腕を開放したりはしなかった。
むしろ一輝が騒ぐからこそ人目を集める結果となっているようだ。
そう気づいた一輝は仕方なく口を閉ざしてとにかく人気のないところまで我慢しようと考えた。
たどり着いたのは学校の奥にあるもう使われなくなった体育倉庫。
一輝はほんの少しだけ顔をゆがめた。
実は一輝は以前にもここへ来たことがある。
幽霊が出ると噂されるこの旧体育倉庫には生徒たちは近づかない。
けれどひと月ほど前に「真相究明」とはしゃぐ洋介に引っ張られて

きたことがあった。錆びついていた鍵を壊した洋介は中を覗いてなにもないことを確認するとさっさと中へ入っていった。
積もったほこりの上に刻まれる洋介の足跡。
見ていると不思議な気持ちになった。
そんなことを考えていた一輝はふと洋介の様子がおかしいことに気づいて顔をあげた。洋介と一緒にいてこんなに静かになることがこれまでになかった一輝はもしや噂の幽霊が出でもしたのかと思ったのだが、洋介は拾ったらしき何かをじっと見つめていただけだった。
「なんだそれ？」
一輝が尋ねる。
「さあ、なんだろう？」
そうは言いながらも見せてみろと返した一輝に、洋介は口角を上げた顔を向けていやだと拒否を示して早々にポケットにしまいこんで隠してしまった。
そのあとすぐに形だけ鍵がかかっているように偽装してから帰宅した。
すっかりと忘れていたが、鍵はその時のままだったのであれから誰もここへは来ていないようだった。
結局あれがなんだったのかわからずじまいだ。
パタとシールが形だけの鍵を外して扉を開けた。
ほこりの上に残る洋介の足跡。
「そこ、ですわ」
「ですわ」
「へ？　なにが？」
ぼうっと足跡を眺めていた一輝は二人がいっていることがわからなかった。反応さえ遅れて素っ頓狂な声で答える羽目になった。
「ニー様、残滓に憑りつかれてはなりませんよ～」
「よ～」
一輝は眉をひそめた。

「憑りつかれる？　ほんとにここには幽霊がいたってことか？」
「幽霊ではありません～。魔、です～」
「です～」
「魔？」
「はい～」
「はい～」
魔といえば、悪魔に妖魔に魔物に魔王に睡魔に闇魔に……。思いつくままにあげていけば、少女たちは似たようなものでそうした中の一つだと答えた。
「とりあえず。ニー様、生気をくださいませ～」
「ませ～」
まじめな話から一転して能天気な要求を突き付けられた一輝はひくりと頬を震わせた。
「おまえら～、そういうことは学校ではやめろと言っただろう」
「ここには人間は近寄りませんわ～」
「ませんわ～」
「それに急ぎですの～」
「ですの～」
「ニー様のお命にかかわる事態が迫っておりますので、少々手荒になりますがご容赦くださいませね～」
「ね～」
一方的に宣言したパタとシールは言葉のまま強引に一輝を旧体育倉庫の陰に連れ込んで押し倒した。
「うわぁ」
一輝が悲鳴めいた声をあげるもお構いなし。
少女たちはあっという間に一輝の衣服を剥ぎ取ると、自分たちも制服を脱いで裸になる。
「死にたくなければおとなしくなさってくださいませね～」
「ね～」
どこか真摯な瞳で見つめてこられ、一瞬一輝の抵抗が止まる。そ

の隙を突くようにパタとシールがのしかかってきた。
（お、おいっ、胸っ、胸〜）
これまでのように腕にではなく、一輝の胸元にもろに押し付けられてこれまで以上の気持ちよさを味あわされた。
そちらへ意識が向くと今度は二人が揃って唇の両端に口づけてくる。
そうかと思えば一輝の目の前でパタとシールが濃厚な口づけを交わしあったり。しかも一輝の太ももあたりにまたがって座り込んだ状態で。
（こら、おまえら、なに考えてやがる〜）
そう心の中で叫びつつ、時折一輝の膝が持ち上がったりしていたのはやむを得ない事情ということで。
そんなこんなの非現実的な状況に反応してとある部分が立ち上がるとすかさずそこへ口づけられて生気を喰われたり。
そんなことの繰り返しで一輝が息も絶え絶えになったころ、誰も来ないはずの場所に一人の人物がやってきた。

## 温もり

「やっぱり楽しんでるんじゃないか。ねえ一輝君～？」
そこにいたのは洋介だった。
けれども洋介であって洋介ではなかった。
血走った目をして一輝を睨みつけてくる。そんな姿など想像したこともないほどに今の洋介はいつもとかけ離れていた。
しかもなんだろう。どこか違和感を覚える。
混乱したまま視線を下げていった一輝は、洋介の胸元が変に膨らんでいることに気がついた。
そして気がつかれたことに洋介も気づいた。
「ああ、これか～？」
言って制服のボタンをはずして前を開く。
そこには化け物としか思えないおぞましい顔があった。
「な……っ」
驚いて跳ね起きた一輝の両手をパタとシールが掴む。
「ニー様、あれがここにいた魔ですわ～」
「ですわ～」
「あれが……魔……？」
「です～。あれをこれから倒すのですわ～」
「ですわ～」
一輝は勢いよくパタへと顔を向けた。
「倒す！？　どうやって！？」
「こうやってですわ～」
「わ～」
パタとシールは掴んでいた一輝の手を自身のお腹へと導いた。
押し付けられた手が少女の体の中へと沈んでいく。
もはや驚きの声すらあげることもできずに一輝は見開いた瞳で不可解な現象を眺めていた。あまりにも突拍子もなくて現実味がなか

ったことも事実だ。
そこへぐふぐふと下卑てしわがれた声が笑声を発した。
魔、だ。
けれどそれは洋介でもある。
魔と化した洋介は卑猥な笑みを浮かべながらすべての衣服を脱ぎ始めた。
「そんな奴よりも俺と楽しもうぜ。好きなだけイかせてやるからよ～」
魔と洋介。二声が同時に同じ言葉をしゃべる。不気味さが増して一輝は思わず嫌悪感をあらわにした。
「おや～？　一輝君はお気に召さないようですね～。ひひひひ」
ふざけたときに洋介が一輝のことを『一輝君』と呼ぶのは前からだった。こうしたからかいの言葉自体は何度も聞いたことがある。
けれども。この二つの口が同時に同じ言葉をしゃべるということが受け入れられなかった。しかも魔は洋介の胸元から生えているのだ。
目の前にあるものを否定するように固く目を閉じて顔を逸らせた一輝にやさしい声をかけてきたのはパタだった。
「ニー様こちらを向いて。大丈夫ですわ～。わたくしたちがお守りしますから～。ニー様もご友人もどちらもお助けしますので、どうか信じてくださいませ～」
「せ～」
ぽやぽやとしたほほえみが近づき、そして一輝の唇に温もりを伝えて離れていった。
何も奪わないただの口づけ。
その優しさに一輝は泣き笑いのような表情を浮かべた。
「よろしくな。パタ、シール」
一輝の言葉にパタとシールはとてもうれしそうな顔をして彼の腕に抱きついてきた。
そして。あたり一面を染め上げるほどの閃光がほとばしる。

反射的に閉じていた目を開いた一輝は、右手に剣を、左手に盾を持ち、左右が黄金と紅蓮の二色に染まった衣装を身に着けていた。
遠い遠い昔。卑弥呼がいたころに着用されていたようなどこか古(いにしえ)の神々を彷彿させる衣装。
右手の剣は刀身が金色に輝き、一輝の拳を覆う籠手のような部分は羽のようにも見えた。パタのお腹に手を入れたから、これは彼女の腰にあった羽なのかも知れない。左手に持っている紅蓮色の盾の方にもよく見れば持ち手の反対側あたりに白い羽の図柄があった。
それにしても。
「どうやったらこんな風に……」
ぼうっと自身を見下ろしながらつぶやく一輝の意識に呼びかけたのはパタだった。
「ニー様、前を向いてくださいませ～」
「ませ～」
盾を持った左手が勝手に持ち上がり何かを受け止める。
その衝撃ではっきりと目が覚めた一輝は、その原因へと視線を向けた。
「……っ」
盾が受け止めたのは洋介の腕から生えている剣だった。
一輝とは違い憑りついている魔が無理やり体を伸ばして武器を作ったようで、あちらこちら皮膚を突き破っているところがある。
そのおぞましさに一輝は息を呑みこんだ。
「本当に洋介は助かるんだろうな！」
魔が剣を振るうたびに洋介からセイキが抜けていくように幽鬼めいた存在へと変貌していく。
魔に襲われていることよりもそちらの方がより恐ろしかった。
「大丈夫ですわ～。完全にとりこまれる前に魔を倒しさえすれば元に戻ります～」
「ます～」
一輝は顔をくしゃりとしかめた。

ますます血走った瞳でねめつけてくる洋介。
どうしてこんなことになったのか一輝にはわからない。それでも一輝にとって洋介は大切な友人だった。たとえ一輝が一方的にそう思っていただけだとしても。それでも友人としか呼べない存在だった。
「俺にできることなら何でもするからっ。だから洋介を助けてくれ！」
「ほんとうに～？」
「ほんとうに～？」
にゅるりとパタの頭部だけが持ち上がり、ろくろ首のように伸びてきても一輝は逃げなかった。
「ニー様、ほんとう～？」
「ああ、ほんとうだ。だから助けてくれ」
ますます近づくパタの顔。
一輝はそっと目を閉じた。
重なる口唇。そこから生気が抜き取られているのがわかる。
そして左腕を伝い上ってきたシールの手が、胸を伝ってこれまでのようにとある部分へと降りていく様子がわかっても逆らわなかった。むしろ反射的に逃げ腰になりそうだった体を意志の力でもって必死でとどめた。
そうしているあいだも一輝の左右の腕は剣と盾を振るって洋介――否、魔の攻撃をかわし、時に反撃もしていた。
「くっ」
生気が抜き取られていくうちに一輝の呼吸が徐々に乱れてくる。
生気は活力。吸い取られて失っていけば力がでなくなってくるのは当たり前だ。全て吸い尽くされてしまえば死ぬこともあるだろう。けれど大丈夫といったパタたちの言葉を今は信じようと一輝は思った。今頼れるのはパタとシールだけ。もしその判断が誤りで命を落としたとしてもそれはそれで仕方がないとさえ考えていた。
目を閉じていても彼女たちにはなんら影響はないようなのでずっ

と閉じたままでいた。なまじ見えてしまうと反射的に洋介を庇ってしまって結果的に最悪の事態を招くことになっては困るからだ。
だからなにも見ず、なにも聞こうとせずにただ洋介の無事だけを祈っていた。
そんな洋介の右腕が肉を断ち切るような感触を伝えてきた。同時に空気を震わせた断末魔の叫び。
恐怖からだろう。一輝の体は反射的にびくりと震えた。
その直後、盾であるシールのこれまでとは違う庇い方と雰囲気で、返り血がかからないようにしてくれたのだろうと一輝は推測した。
両腕にあたたかい温もりと柔らかさが戻ってきた。
「ニー様、もう目をあけられても大丈夫ですわ～」
「ですわ～」
言われたとおりに目を開ければ、そこにはきちんと制服を着た洋介が倒れていた。
セイキを吸われてかなり衰弱してはいるようだが生死に別状はないようだ。
一輝はほっとして肩から力を抜いた。
「ニー様、この方のご自宅はわかりますか～？」
「か～？」
「え、ああ、わかるけど……」
どういうことかと聞けば、一輝が洋介の自宅――できれば部屋を思い浮かべるだけでそこまで運ぶことができるということだった。
まずは洋介を家へと運んで休ませてから一輝の元へと戻ってくるということだった。
一輝は大きく息を吐き出して二人の少女を見返した。
上から下まで視線を動かして見つめる。
きゃっきゃうふふと少女たちが笑う。
「ニー様ったらどこを見てらっしゃるの～？」
「らっしゃるの～？」
少女たちはただ笑う。責めているわけではない。ただ言葉のまま

尋ねているだけ。
一輝は再び大きく息を吐き出した。
「おまえらの体の構造を不思議に思ってただけだ」
この言葉にようやくこれまでとは違う反応が少女たちに現れた。
無垢なほほえみから妖艶な笑みへと。
「わたくしたちは人間ではないのですから考えたところで無駄ですわよ」
「わよ」
その変化に一輝は目をしばたたく。そしてふっと息を吐いた。
「そうだったな」
パタたちの笑みが深まる。
「約束を覚えていらっしゃいますよね」
「よね」
「もちろんだ」
では。
「今宵いただきにまいります」
この一言だけパタとシールの声が揃った。
そうして一輝から洋介の家を読み取った少女たちは、その場から姿を消した。
見送った一輝は己の体を見下ろす。
「ついでに俺の服も着せてくれればいいのに」
恥ずかしそうに頬をわずかに染めた一輝はいそいそと制服を着込むと置き去りになっていた鞄を取りに教室へと戻る。
何も問題になっていなかったことにほっと胸をなでおろしつつ一輝は今夜のためにスタミナのある食事をして帰ることにした。
「そういえば昼飯を食い損ねたな……」
お腹を撫でながら一輝はぽつりとこぼした。
応えるように腹の虫が早く食い物を寄越せと鳴いた。
入浴まで済ませた一輝は全裸でベッドの上に転がっていた。

最後は精気を喰らうのだといっていたのだからこれまでの経験からしてもそういうことなのだろうと考えた結果だった。
そして突然彼の上に現れた少女たちもあたりまえのように裸だったため一輝はこれでよかったのだと安心した。
「覚悟はできているようですね」
「ですね」
「約束だしな。いいよ。好きなだけ喰っても」
一輝はパタとシールへ向けて微笑んだ。
あきらめではなく受け入れる。二人が言うように覚悟はとうにできていた。

ゆるゆると浮上してきた意識に合わせて一輝はぼんやりと目を開いた。
しばらくのあいだそのまま停止して乱れたシーツをただ眺めていた。やがて一輝はゆっくりと寝返りを打って天井を見上げる。
「とうとう童貞卒業か……」
ぼそりとつぶやいた声には特に感情はなかった。
「初めてで一晩中喰われまくるって……これってどうなんだ?」
ぼそぼそと不平をこぼすも後悔からではない。現実味がなくて記憶を漁ることで現状を把握しようとしているのだ。
ちらりと窓に目をやるともう陽は高く昇っている。
「あー……、飯食わないと……」
どんな時でも食事を忘れない。身についた習性になぜか笑えた。
大丈夫。
根拠もなくそう思えた。

シャワーを浴びた一輝は、夜食にと思って買ってきていた焼きそばを食べていた。
洋介が訪ねてきたのはその時だった。
結局パタとシールからは状況を教えてもらえることはなかった。

彼女たちは一貫して自分たちが言えることはなにもないという姿勢を崩さなかった。けれども洋介が教えてくれるだろうということだけは口にしたので待っていたのだ。
いつものようにリビングのそれぞれの定位置に腰かける一輝と洋介。
そうしてから洋介は持ってきていた袋を一輝に差し出した。
「俺を待っていて買い物に行ってないだろうと思って買ってきた」
「サンキュー」
一輝がいつも買っているコンビニとは違う店で買ってきたようだ。普段見ない種類の弁当とおにぎりとサンドウィッチ。同じものばかりだと飽きるかもしれないと気を使ってくれたのだろう。店の名前を確認すると、この店は洋介の家から一輝の家までの道のりにはないところのものだった。
「サンキューな」
一輝はもう一度お礼を言った。
「お礼を言うのも詫びを入れるのも俺の方だよ」
ぽつりと洋介が口を開き始めた。
「俺……、西田のことが好きだったんだ」
「はい〜！？」
突然の告白に一輝は声を裏返らせてのけぞった。
ようは自分が惚れた相手が自分の友人のことを好きだったからあきらめさせるためにあることないことどころかないことないこと吹き込んでいたというわけだ。
一輝は拳を握りしめてこめかみに青筋を浮かべた。
（助けるんじゃなかった……っ）
不穏な気配を感じ取ったのか、洋介は床の上に体を投げ出すとがばりと土下座した。
「すまん！」
勢いがよかったのは最初だけで、あとはすまんじゃなかったすみませんだっただの、いやいやここはごめんなさいがよかったかだの

言い始めた洋介を見ていた一輝は、脱力しながら息を吐き出した。
「もういいよ」
そんなことよりも西田に吹き込んでいた数々の嘘だ。
「あ、それならもう西田に全部白状してきた。俺が今まで言ったことは全部嘘でおまえはずーっとフリーだって」
それはそれで複雑です。一輝はがっくりと肩を落とした。
「それで……、西田から伝言。今日会いたいって」
「それって……」
「おう。たぶん告白だな。その前に今までのことの謝罪もあるだろうけど、メインは交際の申し込みってやつ」
一輝は眉を寄せた。
「おまえはそれでいいのか？」
「言っただろう？　好きだったって。なんかさー、今回の件で吹っ切れたっていうかなんというか……。ま、そういうわけだから受けてやって？　かわいいやつだよ、西田は」
「……受けるかどうかは西田次第だよ」
洋介が薦めたからという理由だけで付き合うわけにはいかないと一輝が言うと、洋介はもちろんそれでいいと答え、さっそく待ち合わせ場所に向かうことになった。

そして旧体育倉庫の前に一輝は西田と向かい合って立っていた。
（ここって滅多に人が来ないって言ってたけど、ほんとは頻繁に人が来てるんじゃないのか……）
そんな風に一輝が考えてしまうほど最近はよくこの場所を訪れていた。
思わず漏らしそうになったため息をこらえて西田を見かえす。
洋介から事情を聞いた。なにもしていないのに責めたりしてごめんなさい。
と、そこまでは難なく進んだのだが、そのあとの西田は口を開きかけてはとどまるということを繰り返していた。

「あの〜、謝罪ならもう十分だから他に用事がないなら帰ってもいいかな？」
埒が明かないので後日にしてもらおうと一輝がそう声をかければ、途端に西田が泣きそうな顔をした。
さてどうしたものかと視線を逸らせば、隠れている洋介と目があってしまった。
どうやら泣かすなと言っているようだ。ジェスチャーだけだとあまり自信はないが、たぶんそんな感じだろう。
とはいえ一輝にはどうしようもない。
西田へ視線を戻して再度今日はこれでと切り出せば、慌てて引き留めるように一輝の袖を掴んできた。
必死な姿がなんだかかわいく見えてきた。なんとなく頬のあたりが赤いような……。しかし眼鏡が邪魔でよくわからない。
「なあ西田、ちょっと眼鏡外してみて？」
「え？」
「いいから」
一輝がにっこりと笑って繰り返せば、さらに赤くなった顔。
（うん、かわいいなぁ）
そんな風に思って一輝がさらに微笑むと、西田は照れながらそっと眼鏡を外した。そして上目づかいで恥ずかしそうに言った。
「これでいい、かな……？」
赤く染まったかわいい頬がはっきりと見えた一輝は満面の笑みでうなずくと、すっと顔を寄せて触れ合わせるだけのキスをした。
「かわいいよ」
「え？」
驚いた顔で両手で口を塞ぐ西田。そりゃそうだろう、と一輝も思ったが予想以上に唇がおいしくて再び欲しくなった。
「もう一度……いい？」
すぐそばまで顔を寄せて、そう囁く。
かすかに震えながらも手を胸元まで下して瞼を閉じた西田。

一輝は嬉しそうに笑う。
そうして今度は先ほどよりは少しだけ長いキス。
一輝は壊れ物を扱うように西田をそっと抱きしめた。
「好きだよ……」
無意識に言葉が零れ落ちたけれど、一輝は後悔しなかった。
少しだけ体を放して顔を覗き込めば、西田は涙を浮かべていた。
「どうしたの？　いやだった？」
途端に首を振って西田は否定を返す。
「好き」
小さな小さな声がようやくそう告げた。
あとは流れる涙と一緒にどんどんと。
「好き。好き。二ノ宮君が好き」
うん、と一輝が応えてもう一度キス。
「俺も優芽が好きだよ」
そう一輝が言った途端、西田優芽は満面の笑みを浮かべた。本当にうれしそうな表情だった。
つい一輝は優芽を抱きしめてしまった。
私服越しに伝わる温もり。そして柔らかな……げふんげふん。
まだ触っちゃダメだよね。
（わかってるよ。だから睨むな洋介）
でも、いつかは。
そんな風に思いながら一輝は温もりを堪能するように目を閉じた。
パタとシールとのことはやはりただのセイキの供給と報酬の支払いでしかない。
男だって、やるなら心がともなっている方がいいに決まっている。
そっと背中に触れてきたやさしい温もり。
一輝は嬉しそうに頬を緩めた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6875s/

---

温もりはセイキ

2011年4月27日18時26分発行